

## 福島県松川浦におけるサキグロタマツメタ移入の 経緯と現状

佐藤 利幸

福島県水産試験場相馬支場

### 1. はじめに

松川浦は福島県北部の相馬市に位置する面積約6.5haの閉鎖性潟湖である。産業的には県内唯一の水産養殖漁場として、主にヒトエグサ、アサリ、カキ等が生産されている。

近年、アサリの食害生物であるサキグロタマツメタ(図1, 2, 3)の生息が確認され、アサリ漁業への影響が懸念されている。ここではサキグロタマツメタが松川浦に移入した経緯と現状について紹介する。



図1. サキグロタマツメタ(2007年8月14日、水産試験場相馬支場で撮影)。

### 2. サキグロタマツメタとは

サキグロタマツメタはタマガイ科の巻貝で二枚貝を捕食する。本種の分布域は本来、中国、朝鮮半島沿岸域であるが、国内にも分布し、有明海及び瀬戸内海の一部にごく少数が生息する。

### 3. 移入に至る経緯と経路

国内では一部の海域のみに分布していたサキグロタマツメタが、近年、日本各地で確認されるようになった。特に宮城県では1999(平成11)年4月、アサリへの食害が深刻な問題として取り上げられた(酒井 2000)。松川浦では2002(平成14)年に生息が確認された(鈴木 2005, 2007)。

日本での分布域が拡大した背景には、国内産アサリの減少に伴う外国

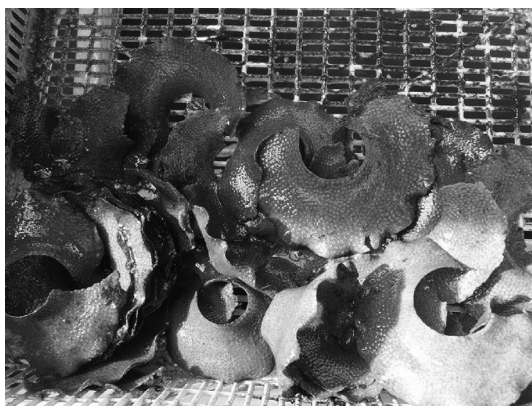


図2. 2007年9月に福島県松川浦で採取されたサキグロタマツメタの卵塊(通称砂茶碗)。

産アサリの輸入量の増加とアサリ漁業における「移植」行為がある。外国産（主に中国）アサリにはサキグロタマツメタの混入が確認されており、外国産アサリの移植が分布域を拡大させた要因と考えられている。また、国産アサリ種苗として流通するものの中にサキグロタマツメタが混入することによる二段階移入も確認されている（大越 2007）。松川浦の場合、過去に外国産アサリを移植した経緯はないことから、国内産のアサリに混入したサキグロタマツメタが移入したものと推測される。



図3. サキグロタマツメタに食害されたアサリ（2007年11月22日、福島県松川浦）。

#### 4. 宮城県の事例と松川浦における現状

宮城県では、食害により万石浦及び松島湾内で潮干狩りが中止に追い込まれる事態となっている（大越 2007）。このため、他の漁場からのアサリの移植を中止するとともに、漁場全域でのサキグロタマツメタ及びその卵塊駆除を継続している（大越 2007）。また、試験研究機関においても生態調査やその結果を利用した効果的駆除方法の開発に取り組んでいる。

松川浦では、食害による漁業や潮干狩りへの影響はみられていないが、漁業関係者は駆除の必要性を十分に認識し、2004（平成16）年より漁期中における成貝駆除と産卵期における卵塊駆除を継続しており、2004年には1.5トンの卵塊が駆除された。しかしながら、本種は完全に砂中に埋入していることが多く広大な浦内での探索と駆除には限界があること、浦内での再生産が確認されていることから、より効率的な駆除対策を検討しなければならない。

#### 5. 今後の課題

松川浦ではサキグロタマツメタによる食害は顕在化していないものの、少なからず食害が生じていると考えられる。分布量や食害の程度など定量的な現状把握がまず必要である。そして、駆除の効率化を進めるために、分布特性や行動様式といった生態的知見を充実させることが必要である。

現段階では、松川浦において本種を完全に駆除することは不可能と考えられることから、アサリへの食害を最小限にするためには、駆除活動を継続するとともに、アサリ移植の際に選別を徹底してサキグロタマツメタを除去し移入を防止することが必要であろう。

## 引用文献

- 大越健嗣（2007）非意図的移入種による水産被害の実例-サキグロタマツメタ．日本水産学会誌 73: 1129-1132.
- 酒井敬一（2000）万石浦アサリ漁場におけるサキグロタマツメタガイの食害について．宮城県水産研究開発センター研究報告 16: 109-111.
- 鈴木孝男（2005）底生動物（松川浦の底生動物群集及び底泥）．福島県生活環境部自然保護グループ，重要湿地松川浦総合調査報告書，福島，pp. 55-83.
- 鈴木孝男（2007）仙台湾．環境省自然環境局生物多様性センター，第7回自然環境保全基礎調査浅海域生態系調査（干潟調査）報告書，富士吉田，pp. 32-38.